

九年前母は左手足がマヒし、病院での検査の結果、肺原発の脳腫瘍と診断、余命四ヶ月と宣告される。その短い期間母と家で過ごしたい。今後母の具合が悪くなることを予想した担当医が、介護保険適用のための意見書を書いて下さった。

だんだん歩けなくなった母は要介護五と認定される。母を家の風呂に入れられなくなった。ケアマネジャーは、デイサービスで入浴させることを提案した。

その頃ちょうど近所にできたばかりのデイサービスの施設を紹介させる。まだあまりその存在が知られておらず、利用者も少なく、ゆったりとした雰囲気だった。二十～五十代と職員の年齢層が幅広い。

母を預ける前、施設で三十代位の男性職員と打ち合わせをする。物腰柔らかな態度と相手の立場を尊重しようとする姿勢に安心し、母を任せようと決意した。

週二日母を通わせることになる。いつも介護ばかりだと疲れるので、私が休めるようにとの計らいでもあった。

母を預かってもらっている間もその施設を訪ねたことがある。二人の女性職員が、特殊浴槽に母を入浴させる。

時間を計り、丁寧に体を洗う。意識の混濁した母がタオルで顔を拭こうとすると、「自分でやろうとしているね」と微笑ましく見つめていた。

母は食事中傾眠しがちだった。介助する職員は母のペースに合わせて、食事を口元に運ぶ。仕事とはいえ、その忍耐強さには頭が下がる。娘の私でもいい加減苛立ってくる。

母の容態の変化により、施設の利用は数回で終わる。その際職員に「何か私達に落ち度がありましたか」とすまなそうに言われ、私の方が申し訳なく思った位だ。忘れ物をわざわざわが家まで届けてくれたこともある。

母の病を通して福祉のありようを垣間見る。利用者とその家族の便宜を図ろうとする職員達に、容易ならぬ介護生活が支えられた。あのときの職員たちはどうしているだろうか。母も私のことも忘れてるかな。